教育未来創造会議
ワーキング・グループ
第４回議事録

教育未来創造会議担当室

教育未来創造会議
ワーキング・グループ（第４回）
議事次第

日時：令和４年４月 18 日（月）16:30～18:30

場所：文部科学省第二講堂

１．　開会

２．　第一次提言案について

３．　学びの支援の充実、学び直しの促進について

（配付資料）

資料１　　我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について
　　（第一次提言）（素案）

資料２　　参考資料集

資料３　　参考データ集

資料４　　有識者構成員資料

○清家座長　それでは、定刻になりましたので、これから少し遅れていらっしゃる方もおられるかと思いますけれども、ただいまより第４回「教育未来創造会議ワーキング・グループ」を開催いたします。

皆様方には、御多忙の中、御参集を賜りまして、ありがとうございます。

本日、末松大臣はやむを得ない御都合により17時30分頃からの御出席となります。また、今日、この場には既に池田副大臣、鰐淵大臣政務官に御出席をいただいております。

委員の中で東原さん、日比谷さんは御都合により御欠席でございます。代わりに資料にて御意見を表明いただいております。その他のワーキング・グループの皆様には御出席をいただいております。

また、文部科学省より義本事務次官、高等教育局増子局長、森田審議官、里見審議官、総合教育政策局神山生涯学習推進課長が御出席でございます。

加えて、本日は自由民主党・教育・人材力強化調査会の柴山会長、公明党・教育改革推進本部の浮島本部長がオブザーバーとして御出席です。

今、御紹介した方の中にもまだ御到着されていない方もいらっしゃいますが、会議を進めさせていただきます。

なお、本日はこのような形で対面とオンラインのハイブリッドで開催しておりますが、オンラインで御参加の方で操作方法等の御不明な点がございましたら、事務局まで御連絡をいただければと存じます。

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

本日は、第一次提言案について議論を行います。

まずは事務局より資料１の第一次提言案について御説明をお願いします。

○寺門次長　担当室の次長の寺門でございます。

資料１でございますが、まず１ページを御覧ください。今回事務局で作成いたしました第一次提言の素案ということで、基本的にはこれまでお示しした論点整理案について、委員の先生方からの御意見を踏まえまして肉づけする形で作成、お示しをしてございます。

冒頭、この提言のタイトルの案とともに「はじめに」として、提言の位置づけについて記載してございます。

その下の「Ⅰ．背景」、４ページの「Ⅱ．基本的考え方」については、既にお示しをした論点整理案と同様に、これまでの皆様からの御意見を踏まえまして整理をしてございます。

６ページを御覧ください。ここから「Ⅲ．具体的方策」として、３つの柱である「１．未来を支える人材を育む大学等の機能強化」「２．新たな時代に対応する学びの支援の充実」「３．学び直し（リカレント教育）を促進するための環境整備」それぞれについて、新たなリード文として趣旨を記載させていただいた上で、それぞれ具体的な取組を整理しておるという構造になってございます。

１つ目の柱の「未来を支える人材を育む大学等の機能強化」、６ページにつきましては、

その冒頭で人文・社会科学の重要性、また「総合知」の重要性を明記した上で、７ページからの下段になりますが、（１）進学者のニーズ等も踏まえた成長分野への大学等の再編促進に向けては、前回の３月末の親会議での岸田総理大臣からの御趣旨を踏まえまして、８ページの３行目最後から、現在35％となっている理系分野の学問を修得する学生の割合について、この分野に進む女子の増加やデータサイエンスなど文理を超えた学習が進むことも前提に、OECD諸国で最も高い水準である５割程度を目指すなど具体的な目標を設定した上で、標準設置経費等の規制の大胆な見直し、また、再編に向けた初期投資、開設年度からの継続的な支援、高等専門学校、専門学校等の機能強化等について整理して記載してございます。

11ページから、学部・大学院を通じた文理横断教育に向けましては、文理横断の観点からの入試出題科目の見直し、それから、「出口での質保証」の強化等について整理、記載してございます。

そのほか、13ページになりますが、「（３）理工農系をはじめとした女性の活躍推進」、16ページになりますが、「（７）知識と知恵を得る初等中等教育の充実」について、それぞれ整理して記載してございます。

２つ目の柱につきましては、19ページを御覧いただきたいと思います。「新たな時代に対応する学びの支援の充実」につきましては、この点はおわびでございます。事前に皆様方には違った形での記載のペーパーをお送りしておったかと思いますが、本日は改めて構成員の皆様方のさらなる御意見を承った上で記載を充実させる考えでございまして、論点整理案と同じ内容で御議論いただくこととさせていただきます。直前に変更いたしまして、誠に申し訳ございませんでした。御理解を賜れればと存じます。

21ページを御覧ください。３本目の柱「学び直し（リカレント教育）を促進するための環境整備」についてですが、次の22ページの「（１）学び直し成果の適切な評価」につきましては、企業による学び直しの評価に向けた新たな支援の実施、キャリアコンサルから学び直し、転職等に向けた伴走支援を一気通貫で行う仕組みの創設等について記載をしてございます。

また、23ページになりますが、「（２）学ぶ意欲がある人への支援の充実や環境整備」、25ページの「（３）女性の学び直しの支援」、そして、26ページの「（４）企業・教育機関・自治体等の連携による体制整備」についても記載してございます。

全員にお送りしていましたことに甘えまして、大きな部分について御説明いたしましたが、第一次提言の素案の概要は以上でございます。本日も忌憚のない御意見を賜れればと存じます。よろしくお願いいたします。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ただいま御説明をいただきました点について、これから議論をしてまいりたいと思います。それぞれオーバーラップをしておりますが、大きく４つぐらいに分けて議論を進めてまいりたいと存じます。まずは「Ⅰ．背景」、そして「Ⅱ．基本的考え方」、

これをまとめて議論をしたいと思います。その上で「Ⅲ．具体的方策」のうち「１．未来を支える人材を育む大学等の機能強化」「２．新たな時代に対応する学びの支援の充実」「３．学び直し（リカレント教育）を促進するための環境整備」、これをそれぞれ分けて議論をいただくというように考えております。

それでは、早速でございますが、この「Ⅰ．背景」及び「Ⅱ．基本的考え方」について、御意見のある方は挙手をお願いいたします。オンライン参加の方は挙手ボタンを押していただければと存じます。よろしくお願いいたします。何か御意見はございますか。

加藤さん、どうぞ。

○加藤構成員　質問含みになってしまうのですが、こちらの第一次提言は提言としてまとめて、10省庁、大臣も参加されていると思うのですが、これはどのように関係各位に理解してもらうという意図でしたでしょうか。

○清家座長　では、寺門さんからお答えいただけますか。

○寺門次長　御説明いたします。

おっしゃるとおり、今回ワーキングでおまとめいただきましたらば、最終的には先月総理も御出席になった会議で提言をまとめるように御指示がございましたので、その会議にお諮りをして、まとまりましたら、実施に向けて例えば文部科学省であれば関係する部署もしくは審議会等でさらに深める、できるものはすぐ実行していくという道行きになっていると御理解いただければよろしいかと存じます。

○加藤構成員　分かりました。ありがとうございます。

官僚の皆さんはもしかして慣れていらっしゃるので、全然大丈夫かもしれないのですが、私は国土交通省でも委員をやっておりまして、そこでは最終的に実行に移さないと意味がないから、文章でもいいのだが、もう少し最近分かりやすくインフォグラフィックスみたいな感じでまとめたりしているので、より多くの人に伝わるまとめ方にしようみたいにそっちの委員会ではなっておりまして、例えばそういうのはどうかなと申し上げてみました。なかなかこの文章スタイルがどこに強弱を置いたらいいのかが難しいなと個人的に思いました。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

事務局から何かございますか。

○寺門次長　御指摘はまさしくごもっともでございます。今日は概要等もなく大部なものを直前にお送りして大変申し訳ございませんでしたが、御指摘を踏まえて分かりやすいものをつくるように座長とも御相談をして配慮したいと思います。御指摘ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

ほかに御質問、御意見等はございますでしょうか。

それでは、関山さん、お願いします。

○関山構成員　ありがとうございます。

この「Ｉ．背景」と冒頭のところということなのですが、一番初めにこの会議に参加させていただいたときにいただいた資料の中に、教育と社会の接続の多様化・柔軟化みたいなキーワードがあったと記憶しているのです。そのキーワードはすごく重要なのかなと思っていたのですが、そういうコンセプトみたいなところがなくなってしまったのか思ったのです。

○清家座長　それは具体的にどの辺りになりますか。

○関山構成員　具体的な話としては入っていると思うのですが、そういうキーワードは分かりやすくて個人的にはすごく響いていたポイントだったのでお伺いしてみたのです。

○清家座長　では、事務局からお答えいただけますか。

○寺門次長　大変に総論的な重要な論点だと思います。各所、例えば我々がいうところの接続というといろいろあるのですが、改めてそういう視点で社会との接続という点についてどういう点が重要かということについては、今日の全体の御議論もいただいた上でもうちょっと精査をして詰めていきたいと思います。

○清家座長　この点は関山さんは比較的最初の頃から御発言の中でおっしゃっていたと思いますので、何らかの形で文章の中に含めていただければと思います。

○寺門次長　分かりました。

○清家座長　関山さん、よろしいでしょうか。

○関山構成員　はい。ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

では、安宅さん、どうぞ。

○安宅構成員　安宅です。

まず「Ｉ．背景」のところと太い方針の話だと思うのですが、ジェンダーパリティー問題が「Ｉ．背景」のところからほとんど消えているのですが、この「在りたい社会像」というより、一番のダイバーシティーの一丁目一番地というか、人口の半分以上が女性なのにもかかわらずリプレゼンテーションが低い問題というのは、そもそもの問題の太いところとして本体に入っていくべきだと思います。方針的にはそもそも学部に入る段階で理工に関係なく特に主要な人材を生み出すような大学においてはもう完全にパリティーを実現すべきだと思いますが、そこの問題意識はもうちょっと強めにあったほうがいいのではないかなと思います。これが１つ目。

２つ目は貧困層問題なのですが、２の（７）というところに「世帯収入が少ないほど低い大学進学希望者」、これもそうなのですが、そもそも家庭の３分の１ぐらいが世帯でいくと金融貯蓄がないという驚くべき状態に今なっているわけで、そのことを考えると、これは別に大学に限った問題ではないですね。かなりの多くの才能と情熱が単純に生まれた環境問題でまともな教育を受けられないという状況があるわけで、これは大学にただ入れ

ばいいという類いの問題ではないと。中高の段階、小中高の段階で彼らの未来は止まってしまう可能性が高いということで、この話はもうちょっとはっきりとソーシャルディバイド問題であり、しかも才能と情熱、社会的に多くの部分がちゃんとリプレゼント(represent)できない、しかも、その才能は捨てられるという問題を強く意識しているのだというのを相当強く言うことは、僕はとても重要だと思います。これは前も言ったのですが、もっと強い問題だと思うということです。

３つ目ですが、これはどこに入っているのかいまいち分からないのですが、今、結局必要なのはデジタル人材というよりもデジタル素養を持って様々な分野で掛け算的に何かを行う人であって、例えばlawyerであってもデジタル素養は欲しいですし、また全然違う領域の文学を研究していても欲しいわけですね。ということで、そういうデュアルな素養を持つ人たちを育てられなければいけないのですが、そこが基本的にあまりできないと。理工系云々というと問題が全然すり替わっていて、理工の問題ではないのですね。基礎素養が足りないという問題なので、そこが根本問題なのだということは問題意識として強くあったほうがいいのではないかと思います。

これを実際に解決しようとすると、これは以前の議論のどこかで言いましたが、学部学科別に人を採ることを基本廃止し、それぞれのメジャー取得要件を設定しないと、デュアルディグリー、トリプルディグリーを４年で取るみたいなものが夢のまた夢と。基本的には例えば大学を出てもう一回学士入学して２つ専門を持つのに６年とかかかるという暇も財政的な余力もないわけですね。学部学科別に人を採るのをやめて、逆にメジャー要件を明確にすることがちゃんとできれば、メジャー要件として求められる単位取得が重なっていればそういうダブルメジャーはずっと容易に取れるわけで、そのようにするのだという打ち手を明示的にやるべきだと思うのですが、そこの話がちゃんと出ていないようにまず見えるので、ここはぜひ強化していただけたらうれしいなと思います。

最後ですが、これは小中高のところの問題が意識として若干低いと思うのです。教育未来創造会議ということになっているのですが、でも、結局そこで決まってしまうということを考えると、そこがしっかりしないと実はちゃんとした大学に行けないわけですね。そういうことを考えると、そこを見直さなくてはいけないですし、そもそも個の多様性やそれを受けた人を育てると言っているのですが、あくまで既存の教育指導要領及び既存の枠組みの中で小中についてはやると書いてあると見受けられまして、そうではなくてこの時代に即して伸ばすものを伸ばす、得意なことをもっと徹底的にやるということは、要はグラニュラーというか、粒子化というのか、ばらばらにして、そこの自由度を高めて変えるというタイプの教育をやるのだと。デジタルの時代に即したベースでシステマチックな改革でちょっとした制度修正などではいけないという問題意識を持っているのだということを打ち出してこそ、この教育未来創造会議の根底的な価値に即しているのではないかと思います。そういう意味で、デジタルの視点で基本教育システムをつくり直してしまうのだということを打ち出せると、全く新しい体制において未来を生み出そうという志に即して

いるのではないかなと思っている次第です。

ということで、ジェンダーパリティーの問題と貧困の問題はもっと下から始まっていて、そこに対して何とかやるのだということをやらないと、結局東京だったらちゃんとした小学校教育を受けないと中高の教育に行けなくて終わる、地方でも中学の教育が駄目だったらちゃんとした高校に行けないで結局大学に行けませんという問題は直らない。３つ目は、小中のところは単なる制度依存などを超えて、もっとデジタル時代に即して全面的につくり直してしまうということをやらないと駄目なのではないかということを、もうちょっと明示的かつ強めに打ち出せると本当にすばらしいなと思います。

一旦、以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、委員の方々から御意見を伺って、後でまとめて事務局からお答えいただきたいと思います。

ほかに御意見はございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、今の安宅さんからの御意見についてお願いします。

○寺門次長　安宅先生の意見、４点ほどありました。前段２つのジェンダーパリティーの問題、貧困の問題について、女性支援という観点で施策レベルでは出ていますが、課題認識でもうちょっと強く書くべきではないかといった御意見だと思いますので、そこは工夫したいと思います。貧困層という問題につきましては、３ページに引用していただきました（７）で大学レベルにとどまっているところはございますので、もうちょっと幅広い文脈かと思いますので、ここも工夫をさせていただきたいと思います。

後段については、後ほどの施策の部分に関係する部分もございますが、例えばダブルメジャーということについては12ページの上段に言葉として出てきますし、さらに大きなお話ですが、小中学校の部分については16ページの部分から初等中等教育についても触れていますが、これはこれまでの先生の御意見とまた今日の御意見を踏まえて、メリハリがついた形でどういう記述ができるかについてはよく工夫をさせていただきたいと思います。それ以外についてはまた御意見をいただきながら工夫したいと思います。

以上でございます。

○清家座長　ありがとうございます。

そうしましたら、ⅠとⅡの部分について特に御意見がないようでしたら、またこちらに戻ることもあるということで、少し先に進めたいと思います。

それでは、Ⅲの「１．未来を支える人材を育む大学等の機能強化」、この部分についていかがでしょうか。

益さん、よろしくお願いします。

○益構成員　この素案について取りまとめ、大変御苦労さまでした。

これについて、細かい点については今日つけた資料で書かせていただきました。それを見ていただければと思います。

１つだけ、９ページのデジタル人材のところがあって、①のところです。「デジタル・グリーン等の成長分野への再編・統合・拡充を促進する仕組みの構築」のところですが、安宅先生がおっしゃったように、デジタルを抜本的に考えるということはそれはそれで僕も大事だと思うので、最初に書くべきだと思います。一方で、現実の目先どうするのだというのもございまして、そういう意味でここに定員の見直し等も書いてあるので、大学も大きく変わろうということが前提ではございますが、そのときに情報系の臨時的な定員増、学生・教員を含めた増加は必要だということをもう少し記載したほうがいいかなとは思っています。

あわせて、これはほかのところを見ると、予算的な裏づけということも書いてあるところは具体的なところにあるのです。デジタルのところはもっと基金なども含めた予算化は重要であるということも、「えい」とばかりに書かないと、なかなかデジタル・グリーンは進まないのではないかと思っているところです。

まずは以上です。ほかのところについては私の出した資料に書いてございますので、御覧いただければ幸いです。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

では、さらに少し委員の御意見を伺っていきたいと思います。

安孫子委員、よろしくお願いいたします。

○安孫子構成員　ありがとうございます。安孫子です。

私も以前から企業側としてはデジタル人材と言われるこの辺は非常に待ったなしだと問題提起をさせていただいている中で、５年から10年の間に本当に行動に移して数字と状態を変えるためには、具体的にもう少し要員計画なり、行動レベルの指針を出していかないと、なかなか変わらないのだろうと思っている中で、デジタル人材について資料を拝見していると、資料２の11ページの中に、これは若宮大臣のほうからデジタル人材を５年間で230万人育成という具体的な要員計画が出ていること、遅ればせながら後で知りました。ということは、少し調べていただきましたが、現在100万人ということなので、５年後までに2.3倍ぐらいの人材を育成することを本当に実現するのであれば、それに見合う候補生としての大学または大学院などで実際に具体的にどのぐらいの人数を増やしていかなければいけないかという目標に入ると思うのです。そういう意味では２倍に増えるのです。ここの学部などの募集人員は２倍を目指して増えていかなければいけないのではないかと考えた次第です。

もう一つ言うと、その人材が即戦力として企業で活躍していただくための学びの内容ですね。この辺を考えていきますと、以前から話している企業と大学側の情報の交流や、または企業のそういった専門人材が授業に入っていくことも必要なのだと思います。具体的な目標数値が資料で出ておりましたので、それをぜひ具体的に指示して表現して、私たちが具体的に動けるように資料が成立できればいいなと思いました。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

ほかにいかがでございましょうか。

加藤さん、どうぞ。

○加藤構成員　安宅先生の話に重複するところもあるかもしれないのですが、例えば７ページなどを見ていただくと、女性の活躍と理系に進もうみたいなことがセットで語られているのですが、理系に限らずそこまでまだ女性活躍推進は実現できていないと思いますし、また、理系と理工系とデジタルということもごっちゃになっていると思っておりまして、先ほどの弁護士さんもデジタルリテラシーが必要というお話がありましたが、おっしゃるとおり、ブロックチェーン技術を使ったNFTゲームが国税庁の見解ではどうなのかみたいなことは絶対必要ですし、ですから、全体的な取りまとめ自体が構造的になっているというよりは、ややステレオタイプというかバイアスがかかっているように感じております。

○清家座長　ありがとうございました。

ほかにはいかがでしょうか。

ここぐらいのところまでで何か事務局からリプライはありますか。

○寺門次長　具体的な記述ぶりの御指摘もございましたので、その辺りは事務局で引き取って精査したいと思います。ただ、具体的な計画などについてはこの提言だけではなくて、実施する段階で各省庁でも努力いただいて具体的な計画をしていくといった取組を引き続きやっていくことが必要だと思いますので、いただいた提言については工夫をして記載の中に盛り込むようにしたいと思います。

○清家座長　安宅さん、どうぞ。

○安宅構成員　先ほどはお答えいただき、ありがとうございます。

私の説明が悪いのか、いまいち伝わっていない気がするのですが、まず、ジェンダーパリティー問題はもっと前面に打ち出さなくてはいけないと思います。この国は40年遅れているのです。今の段階ですぐやったとしてもです。1990年代にアメリカなりヨーロッパの主要大学は、アドミッション段階で半分以上が女性になっています。いいですか。今から10年後まで目指してやるとしても、それでも三十何年遅れです。恐らくそれすら無理です。ですから、これはもう大学入学段階での割合ターゲット指定、本当にクオータで割りつけてやるという世界で普通にやられたことをやらなくてはいけないのです。これは劇的にビハインドだということをはっきり打ち出さなくては。だから、そこをものすごく明示的にやっていただきたいですし、貧困問題はこういうゆるい問題ではないのです。中高の進学校に入る前にはじかれてしまっている現状について打ち込まないと、この問題は解決しないです。これについて直視しているということを打ち込まないといけないと思います。

ダブルメジャー、トリプルメジャーは昨年春かな、自民党の会議のときに相当言わせていただいて、言葉として入っているのはいいのですが、学部学科で人を採り、こういう科目なり訓練の組み合わせでメジャーが取れるという指定がなく、通常の過程で専門別の教

育を受けるのだとしたら、ダブルメジャー、トリプルメジャーを普通に４年間でやれる理由がないのです。そこがあるからできないのだということをはっきり打ち込まなくてはいけない。そこがないことを明示的に言わないと駄目だということで、ここについて問題として認識しているというのをやらないと、本当に全然未来感がなくて、しかも、全面的にただ大学の話だけが前に来ているという意味で、非常に危険な問題だと思います。

今、日本は産業的には超絶ビハインドな状態で、５～６年前に経産省の産構審などですごく議論していたときの状態よりも正直さらにビハインドです。恐らくこのままいけば基幹産業の幾つかは死んでしまう可能性が高い。そのような状態のときに小中学校も含めて一気に直さないと、10年後とか20年後も含めて我々の未来は極めて不幸になってしまうのです。彼らをどうするつもりなのだということです。僕らの子や孫たちをどうするのだという問題で、下からやらなくてはいけないときに上だけやればいいという程度の問題意識だと言っているも同然なので、そうではないのだと。これは下から直さないともう間に合わないのだという話をもっと強めに打ち込まないと、本当に手遅れになるという問題意識を我々は持っているのだということを言わないと、この委員たちはぬるかったねと言われることは間違いない。そうではないということですね。高等教育もいいのですが、初等中等教育のところから触らなければ駄目だということと、これはびほう策では駄目で、システマチックな改革が必要で、今の教育指導要領の枠組みの中で全部やるという類いのものでは多分うまくいかない問題が多発している。一人一人に合わせるというのは、指導要領でこれを何コマみたいな発想とはかなり異質なものであって、それを全面的に関係する法令も全部見直すということまでデジタル時代に即して変えるのだということをやらないと多分間に合わないという問題意識を打ち込まなくてはいけないのではないでしょうか。

そこは全然違う話で、デジタル人材は不足していますが、それはずっとそうなので、そういう問題はそれはそうですが、今のやり方の延長では答えがないという問題意識だということを結構強めにやらないと、せっかく岸田首相がこれだけ打ち込んでいただいた教育未来創造会議は、昔から言っていることをちょろっとやれることをやりましたということになってしまうと思います。特に初等中等教育で何とか触らないと、触れるものが触れないと思います。このままで本当に子供たちが大人になってしまうので、そこに強い問題意識があるのだということをぜひと思います。

最後、字余りですが、前回も言いましたが、そもそも現状認識としてリカレント教育の部分についての問題意識が足りていないと思います。僕らは100年生きる時代に生きていて、一生最初の20年余りの教育で何とか食っていけるなんて時代はとっくに終わってしまっていて、そのことを考えると、40代、50代、60代で大学に入り直すなり、専門学校に行き直すなりという必要があるのですが、そのことについての問題意識がないということです。それの打ち手は後で議論するのだと思いますが、５年に１回ぐらいはサバティカル的に訓練するなり、週に１回ぐらいは自分のリカレント的な教育のために時間を使えるみたいなことに対応するような仕組みが今のところこの社会にはないので、普通はそんなことをや

ると恐らく霞が関でも首になりますし、普通の大手企業でも首になりますし、ほかの地方の会社でも首になってしまうわけです。だから、そこのところに対して我々はくさびを打つのだと、ここが問題なのだと思っているということを結構明示的に言ったほうがいいと思うのですが、それは今のところなくて、そこは強めに入れていただいたほうが我々の社会の未来にとって明るいのではないかなと思うところです。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

ほかにいかがでございましょうか。

高橋さん、よろしくお願いいたします。

○高橋構成員　高橋です。

「１．未来を支える人材を育む大学等の機能強化」というところで、女性がSTEAM分野に進学しないという現状は世界的に見ても顕著なアンバランスを示しているということが書かれているかと思うのですが、この辺り、世界と比べてアンバランスだから課題だというように見てとれるのですが、こういう書き方はあまりよくないかと思っていまして、今後少子化で人口が減っていくというときに、性別関係なく日本人全員がちゃんと学び、夢を描いて、課題を解決し続けられる人材にならないといけないわけですし、安宅先生もおっしゃったとおり、そもそもジェンダーパリティーに関する認識がものすごく低いと言っているような文章に見えてしまうので、もう少し書き方を検討していただければというのが１点です。

（１）で理工農系を専攻する学生の割合の目標を書いていただいているかと思うのですが、このワーキング・グループでこれまでにそもそも文理の文系・理系を大学入試のときに選択することが問題であるという提言は何度もなされていますので、この理工農系を専攻する学生を何％に定義すると言っていること自体が文理の枠を取っ払っていくということと矛盾しているような印象を受けておりまして、文理の枠を取っ払うことは検討するが、特に現状変更はなく理系の割合を少し増やすことを目指しますよというように見えてしまうので、その辺りはもう少し抜本的に変えていくという前提で数値も書いたほうがいいのかなと思っております。

あと１点だけですが、先ほど安宅さんがおっしゃったリカレント教育のところについても同感でして、その点については議論が戻ってしまうのですが、「Ⅰ．背景」の課題のところにリカレント教育の点は入っていないと思いますので、そこも前提として入れたほうがいいかと思いました。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

ほかに何か御意見はございますか。よろしいですか。

加藤さん、どうぞ。

○加藤構成員　前段のこれができていない、これができないから埋めなくてはいけないの

だという他人、他国との比較からのものより、産業変化とか、社会の変化とか、貧困層に関しても多分20年前の我々が思う貧困とはもう全く違っていて、社会全体が沈んだので相対的貧乏に全員なったので、意外とほとんど大多数がそういう状況になっている。過去20年ぐらい、もうロストジェネレーションというか、失われた時代に対する反省から、ありたい未来から逆算して抜本的に変えていくことができないかなと思います。

各論でいうと、この委員会でこのテーマは私しか言えないので申し上げさせていただきますが、資料４－１を添付資料でつけさせていただいたのですが、これは政府目標なのですね。一番上の資料は政府目標です。消費額15兆円で、この額がどうかというと、２個目をめくっていただいて、自動車の輸出額を超えますという話です。ですが、観光は本当に７ページの下から数行目に２文字だけ入っているだけなので、どう我が国の産業構造が変化して、どう求められているか、成長戦略に資するかという観点、構造的に捉え直す必要があるのではないかと思います。

次のページを見ていただくと、経団連さんも観光庁から省にしたらみたいなことをおっしゃっていたり、アメリカが世界で観光収入第１位の国なのですが、19位にコーネル大学というアイビー・リーグの大学がホスピタリティー学部で有名で、星野リゾートの星野社長とか、蔵王温泉の御曹司とかがここ卒業なのですが、みんなそっちに行くのです。

ですが、立教が悪いというわけでは全然ないです。1998年に慧眼で観光学部を開設していただいたのですが、世界ランキングでいうと1000位から1200位というランキングが出ています。観光一つ取ってもこの国の未来がどうなるのかというところにバックキャスティングで考えて、手なりの延長ではなくて、社会も変わってしまったし、日本も変わってしまった。沈下してしまったし、ここから再度浮上していかなくてはいけない。国も強く豊かにして、個人の幸せになるための教育が必要なのではないかなと思っております。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ほかにいかがでしょうか。

関山さん、お願いします。

○関山構成員　ありがとうございます。

これまでの皆様の御発言などを否定するものでは全くなくて、別の視点からということなのですが、この国の未来を考えるという視点でいうと、ここに「未来を支える人材を育む大学等の機能強化」ということが掲げられているのですが、本当にトップレベルのところに世界からトップレベルの人が集まるというのは、どんどん加速度的にそうなっていくというのは間違いないと思っていまして、グリーンといってもすごく広いですし、今後圧倒的に勝てる可能性のある、例えばちょっとニッチでもいいのですが、そういうところをとにかく世界最高レベルにしていくことをやっていくと、必ず世界中から人が集まっていくようになりますし、そういう人がまた次にさらにトップレベルの人を集めていくという好循環ができてくると思います。

それは自分たちでそういう事業をやっていてもすごく感じるのですが、鶴岡だったり、

山形県のすごい田舎ですが、世界中からすごくトップレベルの人が集まってくださっていますし、我々のライバル企業のような会社からどんどん応募も来るのですが、その理由は、圧倒的にこの分野では間違いなくここが一番優れているとか、ここが一番トップを走っているというものがあると人が集まってくると思います。それをどうにか加速させられるような支援だったり、そういったところはすごく今後視点として重要になってくるのかなと思いました。割と深くグリーンやデジタルを全体的に底上げというよりは、本当に世界で勝てるようなことをやっているところを重点的に支援するという視点だと思うのですが、そういった視点も組み込んでいただけたらありがたいのかなと思いました。

○清家座長　ありがとうございます。

ほかには何かございますか。よろしいですか。

今まで幾つか重要な論点を出していただいたと思います。１つは先ほどのⅠ、Ⅱとも関係しますが、安宅さんなどからも強調された点ですが、要するに、今、我々が直面している問題は、決してリニアな線形の変化ではなくてもっとストラクチュアルな構造変化、人口構造もそうですし、テクノロジーもそうですし、もしかしたらグローバルな関係性もそうかもしれません。したがって、構造的な変化に対応して教育を変えていかなければいけないのではないかという問題意識をもっと強く打ち出したほうがよろしいのではないかということだったかと思います。そのようなことでよろしいですか。

そのためにも、加藤さんがおっしゃったように、そういう大きな構造変化が将来、今、もう来つつあるわけでもあるわけですけれども、ある時点で今とは違う経済社会構造になったときに、そこからバックキャストして今から何をすべきかということをもう少し書き込んでいただきたいということですね。

その際には、これは決してどこかの国にキャッチアップしなくてはいけないということではないのですけれども、例えばジェンダーギャップの問題とか、そうしたところは今の変化の線上に将来を持っていけばいいのではなくて、もうちょっと大きなジャンプも必要なのではないかということ、そういう問題意識のにじみ出るような書きぶりにしていただいたらどうかという御意見かと思いました。事務局におかれてはそのような点、いかがでしょうか。

○寺門次長　座長、おまとめいただいてありがとうございます。

その他、また貧困の問題もまさにそうで、先ほど強調が足りなくて申し訳ございませんでしたが、そういう部分もにじみ出すということでございますし、もともとこの分野は高等教育をメインに議論したといいましても、通底していることは安宅先生のおっしゃったようにより打ち込むと。

それから、最後の関山先生がおっしゃったトップレベルの大学の話も、部分的には研究力強化のところで出てきますが、13ページの③に座長のおっしゃったような構造的な問題の中で分かるような形でより強調するということを工夫したいと思います。御指摘いただきありがとうございました。

○清家座長　ほかにはいかがですか。よろしいですか。

安宅さん、どうぞ。

○安宅構成員　現状が産業的に立ち後れているから、数理・データサイエンス系のデジタル系のものが出ているのはよく分かります。もうちょっと冷静に考えると、我々が大学生ぐらいのときから言われている問題として、日本国の日本単独で食っていける時代は終わるという話がずっと続いていて、それはグローバルというか、地球一つ全体で考えるみたいなことを考えると、英語で普通に交渉できて仕事ができないとどうかみたいな話はずっとあるのだが、この国は変わらないままなのです。非常に豊かな家に生まれた子弟だけは特殊な教育を勝手にやっていますが、これは僕は日本の教育行政のある種の怠慢だと思います。

例えばドイツ人は、僕が90年代初頭に仕事を始めたときは、特に中高年は信じられないほど英語が下手な人が中心でした。でも、今、若い人はもうペラペラなのです。教育は途中でどこかから入れ替わったのですね。ですから、やれるのです。あんなに英語が下手だったドイツ人があんなにうまくなっているという２つのドイツ人がいることを考えると、やる気の問題であると思います。ドイツはEUを率いなければいけないという問題意識で真剣にやったと思いますが、何で我々は同じ真剣さでやらないのだという話があって、その話は教育未来創造会議という総理の掲げられたお題から考えると、もうちょっとあったほうがいいような気がすると。

また、デジタルの話ですが、大学以降に寄り過ぎている意識が強くて、コンピューターサイエンスをアメリカでは高校で入れてかなり劇的に変わったと聞いています。基本的に入れろということにしてしまって、要は、コンピューターに触れるようにするということを徹底的にやったというのは結構有効だったと米国関係者からお聞きしています。我々も中等教育段階からコンピューターサイエンス的なものをもうちょっと強くするというのは、明示的に問題意識としてあったほうがいいと思うのです。GIGA構想をやるというのは、そこまでやってこそ初めて意味があることであって、この話はもうちょっと強化してもいいのではないかなと思うというのが、今思ったことの２つ目です。

追加ですが、この「基本理念」のところに書いてある話をやろうとすると、実は文化やヒューマニティー、美意識、価値観、美しいものに対する素養など、その人なりに感じるもの、覚えるとかではなくて、こういうものが欲しいよということを描く力がめちゃくちゃ重要なのですが、ここに書いてあるものは、これが今はまるで問題がないかのように見えるのです。そうではなくて、実はそちらの耕しも同じぐらい大事なのだが、デジタルで敗戦したせいで心がそちら側にばかり行ってしまっているみたいな問題意識もどこかに入れておかないと、このⅡの１のところにつながらないのです。Ⅱの１というのはその問題が背景にあって、今、ラグジュアリー市場みたいなものがすごい勢いで世界に広がっていっていますが、実はそちら側が重要だったりするという意味で、そちら側もある。デジタル系の素養は新しい読み書きそろばんとしてはやったほうがいいよというのはやるのだが、

そちら側はそちら側で全く別のレベルで深く耕すのだみたいなものを問題意識として入れておかないと、全体感が寂しいなと思うというのが、今、思った話で、３つです。グローバルな話とコンピューターサイエンスと文化、ヒューマニティー系の話について、教育未来創造ということであれば歴史の暗記の前にそちら側も同じぐらい重大ではないかということです。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、中野さん、よろしくお願いいたします。

○中野構成員　こんにちは。中野です。

デジタル人材ということなのですが、あまり定義がはっきりしないといいますか、理工系の大学、学部を出ているとデジタル人材なのですかというのがびっくりしていまして、例えば英米文学科を出た人は英語の翻訳者として通用しますか。ほぼ無理ではないですか。理工系の学部に行くとあたかもプログラミングができてみたいな書き方はすごく前時代的に感じるのですが、サンプルコードを書き換えるぐらいだったら、もはやその辺の気の利いた小学生でもできますね。デジタル人材の育成ではそういうことをやりましょうよということではなかったのですか。理工系の大学に進む人を増やしましょうというのは、先ほど40年遅れと言われていましたが、40年遅れの考え方なのかなと思って失笑を買うのではないですか。その辺の御検討をもう少しお願いしたいと。

ジェンダーギャップに関して、OECDの調査で、この資料全体を見ていますとあたかも女性が生まれつき数学が苦手ですということを前提としたような感じにやや読めなくもないのですが、これはかなりステレオタイプスレットが利いているということはOECDの調査からも裏づける結果になっていまして、親御さんの期待が、どうも女性が数学が苦手だとか、そういうことを形づくってしまうのではないかという資料があります。別に私が用意した資料ではないですが、ネットを見ればもう資料が出てくるので、ここでお見せしなくてもいいと思うのですが、そういうものがありますので、御両親も含めた形での意識改革は必要かと思いますが、そういう点は盛り込めるのですかね。学校だけが変わっても難しいのか思います。国民全体、親御さんを含めた社会全体の意識が変わらないと難しいというところはあると思います。

というのは、ステレオタイプとともに、人材を受け入れる側も女だから数学ができないでしょうと思う人が相当数いますので、例えば男子学生よりはるかに能力の高い人材がいても、あなたは女だから駄目でしょうと言われる可能性がかなり高いということを念頭に置いていただきたいというのがあるのです。その辺は一文でもいいので盛り込んでいただけると大変うれしいなと思っています。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、安孫子さん、よろしくお願いします。

○安孫子構成員　ありがとうございます。

いろいろ御意見を勉強させていただきながら、国と企業と何か違うのかなと思いながら、企業でいうと、私たちの会社でいくと教育体系を再編したり、能力開発をして結果はどんな数値目標に変わっていくのかというところ、これは労働生産性が上がっていくという結果になっていくのです。そういったところですと今、日本の労働生産性は驚くほど低くて、824万円という数字で、アメリカは1380万ぐらいで、日本の比較からしてもここに効率よく仕事をするというところ、先ほど来出ているデジタル能力を普通の業務の中でどんどん活用していくという待ったなしの効率改善がある。そういったことで、ニトリはここが2300万ぐらい労働生産性が高い企業としてあるところには、数％の専門的なデジタル人材ではなくて業務の中でリテラシーとしてITを回す、そういった教育が本当に今は必要だというところで教育体系の再編を行っているということです。そういう意味では「背景」のところで労働生産性の低さについての改善というところが目標値としてうたわれていないところは違和感もあるなと思いましたので、逆戻りしましたが、御意見させていただきました。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、大坪さん、よろしくお願いいたします。

○大坪構成員　お願いします。

今までの議論の中で、私が用意してきたこんなことを言おうかなというのは、安宅先生、皆さんを含めてかなり重複しているのですが、ずっと感じていた違和感としては、教育の未来の創造会議という非常に期待感の高いテーマなのですが、未来創造感がないかなということを感じておりました。大学教育の変化の前提として、安宅先生がおっしゃったような初等教育から貧困問題や地方のギャップを埋めるなど、根本解決が必要だと思います。今、技術的にも社会的にも背景が相当変わっているので、とにかくデジタルを使ったらどんなことになるのか、既存の枠などを全部取っ払って最適な教育をゼロからやり直してみたらどうなるかという議論ができれば、それこそ未来創造感があるなと思いました。せっかくこれだけの委員の方が集まっているので、そういうことができるのではないかなと。

関山さんがさっき話されていたトップレベルのヒト、モノ、コトを用意することによって世界のトップが集まってレベルが上がるというのはまさに共感するところです。私もこのメンバーの中では異質だと思うのですが、ものづくりの産業界で町工場の集合体としてグループ経営し、それぞれの会社をグローバルニッチトップ企業にしようと思っています。そのためには日本国内、海外も全然関係なく世界のトップになりうる技術を集めていきたい。では、すべてにおいて世界トップの大学をつくっていかなければいけないかというと、私はそんなことはないと思っています。その研究室単位に独自の特色があって、その特色においてすごく強い技術力が集まってくる、それを見て人が集まるみたいなことをやりたいと思うのです。そのために足りないのは、将来像としてどんな仕事があって、そのためにどんな学問が必要で、どんな付加価値を出していて、そのときに基本的素養としてどん

なものが必要かという具体的なリンクが取れないのでしょうか。トップレベルの人を育てるには、そういうものがつながっていくといいのかなと思いました。

デジタル技術という言葉自体が指す領域はものすごく広く、デジタル人材とはそもそも何だみたいな、必要なところはここまでという今回目指す領域や言葉の定義を考えないといけないのかなと思っていました。

両親の意識が変わらないと子供の教育がというのは、中野さんがおっしゃっていた意見、私もまさに賛同しています。そこが変わることによって大分違うのではないかと思います。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ここまでのところで事務局から何かリプライされることはありますか。

○寺門次長　簡単に、安孫子先生、中野先生、安宅先生、大坪先生、それぞれの御指摘の点については盛り込むような形で工夫したいと思います。

１点だけ、具体的に中野先生からありましたジェンダーバイアスの保護者の部分については、14ページの③に取組に向けてということで、保護者などのジェンダーバイアスを排除して取組をすると掲げてはありますが、それでは不十分だということもあると思いますので、最新のデータ等も踏まえて、より記載を充実するような形で工夫させていただきたいと思います。

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、また少し戻ることもあり得るということで、既に少しずつそのことについても議論されておりますが、次の課題でありますⅢの「２．新たな時代に対応する学びの支援の充実」、この部分に関して議論を行いたいと思います。引き続き同じように挙手ないしは挙手ボタンを押していただければと思います。いかがでしょうか。

既に一部先ほどから貧困の問題等も議論されておりますが、ぜひ御意見がございましたらよろしくお願いいたします。

では、いとうさん、お願いいたします。

○いとう構成員　いとうです。

安宅先生がおっしゃったように、貧困層の問題はすごく大きいと思っています。また、初等中等教育から、私も何度も申し上げておりますが、本当にそこから改革をしていかないと、大学でどうするかという問題ではないと思うのです。また、すごく優秀な子でも学校が合わなくて高校を中退してしまって、それが例えば物すごく貧困層だった場合、高校に行き直すのであれば助成が出るのですが、実は高校に行き直せない、でも、高卒認定の試験を受けるということで、大学なら行ってみたいと、そのように思う子もいるのです。でも、そういう子供たちが高校に行き直す、夜学に行き直すと、同じように貧困層でも助成を受けられるかというと、テキストを買いますとか、独学でやりますという子の支援は全然行われていないというところがすごく気になっていて、やる気がある子であればどんな家庭であろうと、例えばシングルマザーとか、シングルファザーとか、そういう方が就

職するのに優位になるから、そういう人が学び直すというところでは厚生労働省が支援をされているみたいなのですが、文科省としては、低所得世帯だが、でも、何とかしてやりたいと思う子供たちの背中を押してあげられるような仕組みづくりをしていただきたいなと、そういうところを御検討いただけたらうれしいなと思うのですが、いかがでしょうか。よろしくお願いします。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ほかに御質問、御意見はございますでしょうか。よろしいですか。

では、安宅さん、よろしくお願いします。

○安宅構成員　これは具体的な打ち手の議論に入っているという認識でよろしいでしょうか。

○清家座長　はい。よろしくお願いします。

○安宅構成員　そうであれば、先ほどの貧困層関連ですが、私はかなりワイルドな古い漁村で育っています。そのときの感覚で申し上げると、正直に言って、親がどうかというだけの理由でその人たちは明るい未来を想像しづらいのです。育った家によって、ここは非常にアンフェアなディスアドバンテージがあるのですね。ですから、チャンスがあるというか、いろいろなことが可能なのだということを多くの人が気づくようなトリックが絶対に要るのだと思うのです。面白い人たちが周りにいて、君たちにもというか、多くの場合、そもそも新しい別の人生があることを想像しづらいのですね。僕が育った環境はかなり特殊かもしれないが、でも、田舎ではよくあるのですが、大学に行っているような親とかがほとんどいない環境で育ちました。ですから、そこを何らかの形でメンタリングをしていくようなこととか、面白いことをやりたい人が通えるようなアウトライアー的な方も育てられるようなところは、場をつくるというのは結構検討する価値はあるのではないかというのが１つ。

２つ目は、貧困側のものは10兆円基金等でPhD側はかなりサポートされるという認識ですが、実は修士で家にお金がないという段階で結構優秀な学生は諦めます。これは僕の周りでも起きています。自分の学生でも学部の間に２本の日本語の論文、１本の英語の論文を出して、大学院に行ったらいいのにと思いながら経済的な理由で就職した学生が今年も１人いました。そのようなことで、僕は修士からのサポートの強化は結構本気でやらないともったいな過ぎると思っていまして、ここも意識していいのではないかということを貧困回りで付け加えたいと思います。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ほかに御質問、御意見はございますでしょうか。よろしいですか。

貧困の問題は大きな課題ですね。一方で、これからの産業構造の変化あるいは技術の構造の変化などを考えると、より多くの教育を必要とする。そうすると、貧困の問題が相対的にさらに厳しくなっている。つまり、昔の例えば義務教育を終えて高校まで行くことが

難しいようなときの貧困の問題と、もっと高い教育を受けないと自分の望むようなキャリアを歩めない時代の貧困の問題と、また違ってきているのかもしれません。ですから、その辺りでいわゆる貧しいという理由で意欲と能力のある人がより高い、あるいはより多くの教育を受けられないということにならないようにするためにはどうしたらよいのかということを具体論として考えていただいているわけで、ここに書かれている内容でよろしいのかどうかということかと思いますが、この辺についてはいかがでございましょうか。

益さん、よろしくお願いします。

○益構成員　初等中等教育の件になると、少し私は発言を控えていたのですが、高等教育側にいる者からの視点ということでお聞きいただければと思います。高等教育の部分でいうと、私は出口管理という言葉を使わせていただいたのですが、今、出口管理をやりたくても、実は入り口管理、大学入試のところですごく過度な厳格な、もちろん入試は厳格であるべきだということは一般論としては正しいのだが、行き過ぎていて、偏差値だけで輪切りにされるとか、そういう問題があるので、そこの点を避けて通って、かなりそこは皆さん過度に神経質になり過ぎていて、ほかのいろいろないいこと、安宅先生などはすごくいいことを言うのだが、全て今の入試制度のところで引っかかって止まっている現実もある。これは安宅先生のおっしゃることを書き入れようとすると、現状の日本の入試の在り方については見直すというか、検討するということは踏み込まないと、せっかくのここでいろいろな議論、僕も今日聞いていておっしゃるとおりというところがたくさんあるのだが、そこに行き着かない気がしてきて、あまりそこを踏み込み過ぎると、入試のことを書き過ぎるといろいろあるので言いにくい部分もありますが、やはり踏み込むべきかとは思いました。それが高等教育側、初等中等教育を受け取る側と言ったほうがいいのですか、貧困の行き着く先の立場からの発言です。

以上です。

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、中野さん、よろしくお願いいたします。

○中野構成員　入試の話が出たので、しばらく前に女性が入試を受けると点数が引かれるという問題がありましたね。あれはどうなったのでしょうね。あれは明るみに出たところだけが話題になってただ終わったという印象なのですが、今でも行われているのではないのかというのを疑わせる節はしばしば見ますが、いかがでしょうか。

それから、これも随分前で2002年のことですが、ある教員の方から、どういう採点基準であるかを酒の席で伺ったことがあります。私から聞いたわけではなくて、本人が愚痴るように言っていたのですね。どういうことを言っていたかというと、研究計画なんかみんな見ていないと。男子学生の場合は見ているかもしれませんが、女子学生の研究計画なんか見ていない、みんな容姿を見ている、容姿でランクをつけて入れるのだと言っていましたね。数だけはそろえなければいけないから男性と女性と均等にするがという話でした。国立大学でも監査が入らないような弱小の研究科だったらこういうことが起きるというこ

とは、ほかの学校はどうなのかなと。どうせ女を育てても結婚するでしょう、出産するでしょう、そのときにサポートできる体制もないし、男を入れたほうが後々いいですよねということになりませんか。

そういうことでいうと、親の問題で能力が発揮できなかったというのは甘えであってという議論が聞かれるかもしれませんが、そもそも社会からそのようにみなされている存在が勉強を頑張ろうなんて思いますかね。ほかの方略で頑張ったほうが得だという中で、デジタルなんか目指しますか。どうせ頑張っても男のほうが評価されるというところで、それをおまえが努力しなかったと言われても、ちょっと困ります。そういう部分は、この文章の中で読み取れますか。つくっている方はみんな男ですね。女ができないのは女のせいだと思っていますねと思う人は多いと思いますよ。女に生まれたのは私のせいではないと女は思っていると思います。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

個別の大学のケースは分かりませんけれども、しばらく前に問題になった入試の性別の問題は、私は今、解決されていると理解していますが、文科省からお答えいただければと思います。

○寺門次長　高等教育局が参加していますので、高等教育局から御説明があると思います。

○清家座長　では、高等教育局から御説明いただけますか。

○寺門次長　手元にデータがございませんが、後ほどまた説明するようにいたします。すみません。

○清家座長　分かりました。

ほかにいかがですか。

どうぞ、いとうさん。

○いとう構成員　今の中野さんの御意見で、確かに私が関わっている大学のある知り合いの教授はすごく大きなラボ、50人ぐらいのラボなのです。すごく優秀な女性の研究員がいるのだが、でも、その方が物すごく悩んでいたのが、その方を自分の直下にしてみんなをまとめる係にすると、本当にいてほしいのだが、結婚して出産といったときにちょっとでも間が空くと、そのラボがもう立ち行かなくなるとおっしゃっていたのですね。それは大学側の問題なのかもしれない。例えば出産したら大学に幾つも保育所があって、保育所がある東北大学などは４つとか５つあって、本当に女性の研究者が幼児を連れて預けて働いて帰ってきて、もうずっと安心して働ける場があるというのもあるので、もしかしたら女性だからという意味で敬遠されてしまうことがあるかもしれないですが、それは大学側や働いている企業が努力をすれば何とか解決できるところまで持っていけるかもしれないなというのは、私の感想ではあります。

だから、本当に中野さんはすごくつらい目に遭われて、ひどい、もう入った修士が悪かったと私はすごく言いたいですが、でも、本当に気の毒だなと。そのようにして過ごさな

くてはいけない女性としてはつらかっただろうなと思いますが、そうならないためにも、周りの環境が努力をすることでそういうつらい思いをする女性が少なくなっていくのではないかなという思いはいたします。

○清家座長　ありがとうございました。

個別のケースですといろいろあるので、ちなみにこれも私の個人的な経験を例に出すことになってしまいますけれども、私は慶應義塾大学商学部で労働経済学を教えていたのですが、実は私の前任者は女性の教授で、また私の後任に採用された方も女性でしたので、慶應義塾大学の商学部の労働経済学は過去何十年の間に在職した３人教授のうち２人は女性でした。ですから、ケースによっていろいろあると思います。

大きな統計的数値で見ると、女性のファカルティーの比率は少しずつ大きくなっていると思いますし、日本のいろいろな組織の中で、ある面でいうとジェンダーパリティーが比較的進んでいるのは大学であるとも思います。企業や、もしかしたら役所とかに比べると。もちろん大学は学問で成り立っている組織ですから、そういう面ではほかの組織よりもジェンダーパリティーは進んでいるとはいっても、それに甘んじてはいけなくて、そこはもっと思い切って進めていかなければいけないのではないかとは思っております。

それでは、この奨学金の問題をもう少し議論していきたいと思いますが、ほかにいかがでしょうか。具体的に今、ここではいくつかの仕組みが提示されていますが、これはこの書きぶりでよろしいですか。奨学金だけではなく、支援の在り方全般についてでもどうぞ。

どうぞ、いとうさん。

○いとう構成員　貧困層の方が、お子さんが大学に行きたい、優秀で行けるとなったときに、実は入学金をまとめて支払わなくてはいけないというのがあるのです。例えば20万ぐらいを一気に払うって結構つらいと思うのです。では、ずっとためておきましたと。でも、高校も行っているし、なかなかまとめて一気にというのはいかないので、どうかその辺りも少し助成でできるのか、支援でできるのか、どういう形がいいか分からないですが、ある一定の基準の貧困層のお子さんが大学に行きたい、合格しました、入学するというときに、耳をそろえて全額払えというのを少し助けてあげられるような制度があったらいいかなというのは思います。

○清家座長　ありがとうございました。

ほかによろしいですか。

関山さん、どうぞ。

○関山構成員　ここに入っていない視点として、これは保育園や幼稚園の話なのですが、私たちも会社で事業所内保育所を２園やっているのですが、今、保育園を運営していて思うのは、最近では認定こども園や地域型保育が拡充されてきていて、就労していない方、就労準備されている方などが割かし入れる環境が整ってきているのかなと思うのですが、個人的な所感としては、できる限り誰でも本当に入れるようにしたほうがどう考えてもその地域にとっても本当にみんなにとっていいと思っています。当然ですが、時間ができる

ことによって次に働くための準備に時間が使えたりということももちろんできます。一方で、仮に親御さんが働いていなかったとしても、子育てだけに時間を使っているといろいろな意味ですごくストレスもたまりますし、家庭の中での様々なひずみというのは一番弱いところに行くので、そういった意味でも子供たちがある意味で保護されるではないですが、そういったところで先ほど１つ前の議論でできる限り子供たちにいい環境を提供する、それは幼児教育からということでもどこかのポイントに入っていたと思うのですが、そういった環境を整える観点からもすごくいいと思います。

実際にこの保育園の今の制度だったりとか、例えば今の人数、子供たちの数であったり、これぐらいの保育士を配置しなければいけないという基準で実際に運営していくと、どう考えても子供たち当たりのスタッフの数が少な過ぎるというか、それだと当然きめ細やかな子供たちに合わせた才能をより引き出してあげられるような環境を整えることは不可能で、それを実際にうちだと国の基準の２倍ぐらいのスタッフは充てていますし、それで実際に通常、生活に困らないぐらいの保育士の方の給与水準を維持しようと思うと、到底黒字化は不可能だと思っていまして、その辺りは本当に社会の基盤になるところですので、できればこういったところにも盛り込んでいただけるとありがたいのかなとは思いました。ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ここまでのところで事務局から何かお答えになることはございますか。あるいは先ほどの御質問について高等教育局の方、お答えいただけますか。

○寺門次長　すみません。まだ高等教育局のほうは準備が整っておりません。

御指摘の点、全体的な話ではいとう先生から厚労省との関係で言及が最初もありましたし、今もございましたので、そういう視点も工夫したいと思います。

また、保育園の関係は、直接的ではございませんが、全体的に貧困の問題を考えるという最初からの御指摘がございますので、そこはよく工夫をして考えていきたいと思ってございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、阿部さん、よろしくお願いします。

○阿部構成員　途中からの参加で大変恐縮であります。

奨学金のところですが、地方自治体や企業による奨学金の返還支援を記載していただき、ありがとうございます。長野県としてもこの奨学金の返還支援に取り組んでいく予定にしておりますが、１点だけお願いがあります。都道府県や企業が行う奨学金の返還支援は、あくまでも地域への人材の定着あるいは企業の人材確保という観点から行いますので、19ページ①にある本来の教育費の支援としての奨学金のあり方をメインにしっかり検討していっていただきたいと思います。

遡って発言させていただいてよろしいでしょうか。提言案の11ページのところですが、地方大学の充実について記載をいただきまして、ありがとうございます。１点だけ修文を

していただければありがたいと思いますが、教育研究環境の整備充実を図るということで、「地方国立大学のソフトとハードが一体となった教育研究環境の整備充実を図る」という方向性自体は大賛成でありますが、現実的にこれから新たな学部の設置あるいは定員増が行われるときに、どうしても国費が十分ではないという意見を聞いています。ぜひここに国費による十分な財源措置ということで、国立大学は国の責任において取り組んでいただくということをぜひ明確にしていただきたいと思います。県も実は県内の私立大学であったり、あるいは公立大学に対しての財政支援、かなりこれまでも行ってきています。ただ、国立大学に対しては、これは同じ行政主体でありますので、ぜひ国の責任において十分な財政措置を行った上で充実をしていただきたいということを明記していただきたいと思います。

それからもう一か所、17ページの初等中等教育のところであります。これについては私ども都道府県が高等学校教育のかなりの部分を地方で担わせていただいております。このことについては、全国知事会でこれからの高等学校教育のあり方研究会という研究会を設置して報告書をまとめておりますが、その中でぜひ分権型の教育制度をつくってもらいたいという提案をさせていただいています。17ページの具体的な取組の中に、高等学校教育を含む初等中等教育の分権型の教育制度をぜひ位置づけていただき、各都道府県あるいは各学校に主体的に効果的なカリキュラムをつくるような権限を持たせていただくこと、あるいは学校長のリーダーシップをより強化していくことを明記していただきたいと思います。

最後、もう一点でありますが、同じ17ページの下から４行目のところに、特別免許状の授与あるいは教員採用の促進ということで、多様な人材の確保について言及していただいていることは大変ありがたいのですが、特別免許状は既に制度としてありますし、長野県も活用させていただいています。ただ、これだけでは必ずしも十分ではないと考えておりますので、ぜひいろいろな専門家が教壇に立てるように教員免許制度あるいは教職員の勤務制度、こうしたことの見直しをぜひしっかり行うということを位置付けていただきたいと思っております。我々もこれから教育の多様化を図っていきたいと思っておりますが、もっと教員免許がなくても教壇に立てるような制度であったり、例えば企業から出向してくるような形での多様な勤務形態といったものを認めていただくことができないと、なかなか適材適所の教員配置が、特に地方は人口減少でありますので、非常に難しいと思っています。そういう意味で、ぜひ教員免許制度あるいは教職員の勤務制度をしっかりと未来志向で見直しを図っていただきたい、そのことを位置付けていただきたいと思います。

以上です。よろしくお願いいたします。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ここで高等教育局担当の森田審議官、よろしくお願いいたします。

○森田審議官　高等教育局担当の審議官の森田でございます。

御質問がありました入試における不公正事案が今、どうなっているのかということでご

ざいます。御指摘の平成30年度の医学部の入試において、性別を理由として一律に差異を設ける不公正な入試が行われていることが発覚いたしました。文部科学省では医学部を設置する全ての大学に対して訪問調査をはじめとする調査を平成30年に行いまして、10大学で不公正な事案があったことを確認し、公表いたしました。この10大学についてはその翌年度も訪問調査を含めたフォローアップ調査を継続して実施しておりまして、入試の改善がなされたことを確認しております。現在、平成31年度以降、男女別の合格率も含め入試情報を大学ごとに公表することを毎年度行っておりまして、不公正な入試は現在においては改善されたことを確認しているところでございます。

以上でございます。

○清家座長　ありがとうございました。

上岡さん、よろしくお願いします。恐縮ですが、このテーマについては上岡さんまでとさせていただいて、その後、次のリカレント教育に移りたいと思います。

それでは、上岡さん、よろしくお願いいたします。

○上岡構成員　先ほど関山委員から保育園についての学びの支援ということで少し保育園の話が出ましたので、一言だけ言わせていただきたいと思います。非常にいろいろな場面で女性の社会での活躍あるいは学生数を増やすというところで、女性を何とか引き上げようというところは大変ありがたいのですが、この中でもたくさんの女性の委員がおられまして、私も個人的な話になってしまいますが、学問や社会の業績の上では能力は男女平等であるべきだと思っておりますが、女性が社会で活躍することになりますと、男性が想像する以上に相当な苦労がございます。そういったところでは、子育てをしながらとか、結婚しながらであるというところで、ぜひそういう変革といいますか、保育園もそうなのですが、子供を安心して預けて自分が働ける環境づくりが、実は女性が大学に進学するとか、大学院に進学するというところに関わってくるのではないかと思っております。自分がどれだけ勉強して社会で活躍したくても預ける場所がない、だったらもう私は家庭に入ればいいやということもゼロではないのかなと感じましたので、一言申し上げました。

すみません。話がずれてしまいましたが、以上でございます。

○清家座長　とんでもありません。ありがとうございました。

それでは、少し時間が押してございますが、最後にⅢの「３．学び直し（リカレント教育）を促進するための環境整備」、この部分について御議論をいただきたいと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、日比野さん、よろしくお願いいたします。

○日比野構成員　ありがとうございます。

先ほどから大きな視点からの議論が続く中で恐縮なのですが、私どもは資料４－４に「自治体との連携によるリカレント教育等への財政支援」というものを用意させていただきました。これは私どものような地方の一大学が地方自治体と連携をして何とかリカレント教育を実現するための一つの財政面の工夫だと思って、一事例としてお聞きいただければあ

りがたいと思います。

資料の２ページを御覧ください。これはふるさと納税の制度を活用して、京都市と市内の大学との間で協定を結んで行う連携活動です。右下の３者を矢印でつないだ図を御覧ください。まず、大学は京都市と協定を締結して、卒業生や在学生の保護者に京都市へのふるさと納税を呼びかけます。寄附する人はその寄附金の使途、使い道について、応援メニューというものがございまして、その中からこの活動にふるさと納税で納めるお金を使ってほしいということを意思表示することができるわけですが、そのメニューに大学の地域連携活動やリカレント教育などのプロジェクトを記載して選んでいただくことになります。寄附された方には京都市から返礼品が届きます。そして、最後に、京都市から大学のリカレント教育や地域連携活動といったプロジェクトに対して一定の割合の財政支援が行われるという取組でございます。一地方の大学と自治体とがこのような工夫をして、お互いにウィン・ウィンの関係の中でこういったリカレント教育あるいは地方連携活動といったものに対する財源として用いる工夫をしておる事例でございます。

次のページをお願いします。この取組は、実は財政支援にとどまらずここにあるような副次的効果が期待されます。まず、リカレント教育についていろいろな方に広報していただけるということがあります。それから、高等教育に対する寄附文化の醸成ですね。実は保護者や卒業生だけではなくて、それ以外の一般の方もたくさんこれに寄附をして選んでいただいていることが分かりました。高等教育に対する寄附文化の醸成にも影響すると思われます。最後に、実はこの制度には大学への支援だけではなくて、学生にも奨学金という形で修学支援にも活用できるという使い道も新たに加わりましたということで、修学支援の可能性もあるということでございます。

以上、大変微視的な視点で恐縮なのでございますが、具体的に地方の一大学が行っているリカレント教育を実現するためには、このような地道な努力をしておりますという事例でございます。

以上でございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ほかに何か御質問、御意見等はございますでしょうか。

阿部知事、引き続き御意見おありでしょうか。

○阿部構成員　ありがとうございます。

27ページのリカレント教育のところですが、長野県もリカレント教育に非常に力を入れていきたいと思っています。日比野学長から先ほどお話があったように、大学と県の連携はこれから相当力を入れていく必要があると思っています。その中で１点、27ページの下から４行目、下から２つ目のポツのところですが、「リカレント教育推進に向けた組織の整備など」と書いてありますが、「組織の整備」を「専任教員配置を含めた体制強化や組織の整備」にするなど、人の話をぜひ明記していただきたいと思っています。といいますのは、これはかつて文科省が平成27年度に調査した、大学が社会人向けのプログラムを提

供するための条件として一番多く大学側から出てきている課題は、教員の確保になっています。長野県も昨年独自にアンケートを県内大学に行いましたが、リカレント教育を進めていく上での懸念として、「教職員の確保が難しい」、「教員の時間確保が課題だ」という意見が出ています。学生向けの教育を行いながらプラスアルファでリカレント教育を行うためには、教員の充実強化が更に必要だということだと思いますので、ぜひそういった点を入れていただき、大学側の体制を整備していただければ我々も大学と連携したリカレント教育をしやすくなりますので、この点をぜひ、明記をいただければありがたいと思っています。よろしくお願いいたします。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、リカレント教育について、ほかに何かございますか。

安宅さん、どうぞ。

○安宅構成員　ありがとうございます。

幾つかあるのですが、まずリカレント教育も先ほど益先生がおっしゃったとおりアドミッションは大事だと思うのですが、ここも根本的に見直しをしていただいて、ジェンダーパリティーももちろん枠として入れてほしいですし、点数の１点がどうこうというよりもポテンシャル的に採るのだという視点をしっかり入れないと、リカレント側は壊れるのではないかなと思うと。

リカレントのもう一つについては、これは前々回かどこかでお話ししましたが、特に４月入学者に関しては、学部で普通に18、20で入ってくる連中とカニバリを起こすのです。これがまずいのです。ですから、僕はリカレント教育の人は別枠化したほうがいいと思います。その18歳、19、20みたいな人たちのチャンスをリカレントで奪うというのは全く本末転倒なので、それは分けるべきだという話を明示的に入れておくと非常に大学としてはやりやすいと思いますし、そうしないと、先ほどの益先生のおっしゃるとおり入り口の超絶厳密な世界のところ、何だか全く別の話なのだということですね。

３つ目は、これは特に欧米、特にアメリカの大学では顕著ですが、ヨーロッパも結構やっていますが、海外の大学は実はリカレント向けのプログラムがかなり充実している。すごく忙しい人たちが週末及び夜や年に何回か２～３週間の訓練を受ければ何とかフルフレッジのディグリーを取れるようなプログラムが結構存在しています。サーティフィケートプログラムも結構存在している。あれらをもっと充実させるというのは今の文言でも読み取れなくはないのですが、結構深い読みをしないとそこまで到達しないので、明示的に言っていただくとより大学側としてもやりやすい、高専も含めて相当やりやすくなるのではないかと思ったところです。あとは専門学校も実は相当余力があると思いますので、幅広くそこはあり得るかなということで、人生何回でもチャンスがあって、何回でも才能はよみがえるというすてきな未来に向けて我々はつくっていくのだというのは、すごく教育未来創造会議的かなと思った次第です。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

この点につきまして、ほかにいかがでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、後ほどこんなことに気づいたのだがということがございましたら、事務局にメールをお送りいただければと思います。

最後になりましたが、本日オブザーバーとして参加をいただいております柴山会長、そして、浮島本部長から、本日の議論についての御感想などがありましたら伺いたいと思いますが、柴山会長、いかがですか。

○柴山会長　自民党の教育・人材力強化調査会長、元文部科学大臣の柴山昌彦でございます。

今日は本当に有意義な議論をいただき、ありがとうございました。

さっきの女性の医学部の入試、東京医科大学の不正入試を取り扱ったのは私が大臣時代のときでありました。今、縷々お話があったとおり、大学の採点のみを公正にしても、社会の実相が変わらなければこの問題を究極的に解決することはできません。ということで、ここに書かれている例えば女子学生に対する支援などはもちろん大事なのですが、そういったトータルの改革が必要なのだろうと思います。

あとは社会人も含めておっしゃるとおり１点刻みの入学試験の改革ですとか、あるいは安宅先生もおっしゃってくださいましたが、結局企業として何を再教育するのかということは、それは新人の学生とは違うだろうということですので、私ども自民党でもいわゆる大学のローコード、こういうものさえ学び直してくれればいいですよというニーズにいかにしっかりとしたマッチングしたプログラムができるか。それは例えば企業でその人がどういう履歴を持っているかとか、かつて大学で何を学んだかとか、そういうデータがうまく共有できれば、そういうコースをつくるのにも大変役立つのかなとも考えております。リカレント教育において、例えば今回コロナで利活用されたテレワークをより柔軟に活用するのがいいのではないかという意見も私どもの会議でも出されたところでございます。

大学の修学支援におきましては、先ほども少しお話が出ていましたが、修士課程に対する学びが実は手薄ではないかということですとか、あるいは親御さんが学生の面倒を見るという日本の古来のメンタリティーも、そろそろ修士課程になったらそういうところでもないだろうというお話もあり、ここのところでより柔軟な出世払いの仕組みを導入していくというのは十分理屈が立つのかなとも考えております。

それから、今、非常にデジタル人材の展開が求められているということで、先ほど来、学部のスクラップ・アンド・ビルドということも言われていますし、外部人材の利活用ということも言われていますが、この分野においては特出しでしっかりと力を入れていく必要はあるのかとも考えております。

最後になりますが、我々高等教育もリカレント教育も学びの保障もこれからの非常に重要な問題だと思っていますし、それは初等中等教育の改革ときちんと接続するような形で進めていかなければいけないとも考えております。トータルとしての絵姿を見るというこ

と。

それと、大胆な財源を使うということで、我々、教育国債や特定の税財源はどうなのだということも昔からずっと訴えているところでもありまして、池田副大臣もうなずいていらっしゃいますが、財務省に対して教育というものが究極の乗数効果を持つ投資であることを皆様と認識を共有して、一生懸命頑張っていきたいということを最後に申し上げます。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、浮島本部長、オンラインで御参加でございますが、いかがでございましょうか。

○浮島本部長　ありがとうございます。

３月16日に引き続きまた本日も参加をさせていただき、本当にありがとうございます。

有識者の先生方には本当にたくさんの多様な御意見をいただき、感謝を申し上げさせていただきたいと思います。

今日もお話を伺っていまして、初等中等教育、ここが大切であるというお話もたくさんいただいておりました。私もこれは本当に大切な問題だと思いますので、ここはしっかりと重視をしていかなければならないと思っております。

また、今日のお話の中にも学部学科のお話もまた出てまいりました。この学部の編制などにつきましては、社会構造も大きく変化する中で、かつて行政の目線のサプライサイドの手法ではなくて、女性がバイアスを離れて自分の進路を自分で選ぶようになったらどんな大学教育であるべきか、また、実際に情報産業などで働いている人は大学の教育で何を期待するのかといったデマンドサイドに立って行うべきはないか、あるべきではないかと私は思っております。

また、文理転換という発想ではなくて、そもそも文系と理系を明確に分ける発想自体をやめるという文理廃止という考え方に立って進めるべきではないかと思っているところでございます。

また、奨学金のお話も縷々ございました。これは我々公明党もずっと昔からお伝えをさせていただいておりますが、実はこの４月15日金曜日も文科委員会のほうで私も質問をさせていただいたところでもございますが、この所得連動返還型を既卒者、これもたくさんの現場からお声をいただいております。夫婦２人で返還をしている、そして、子供が欲しいが２人とも返還をしているからなかなか子供を産み育てることができないという現場のお声もいただいておりますが、この所得連動返還型方式を既卒者の方に、また、有利子の奨学金への適用など、あとは減額返還制度、この年収の要件の緩和、これを訴えてきたところでもございますが、今回の委員会でもお伝えを大臣にさせていただいたところでもございます。

また、この所得返還制度、この方式から現場からお声をいただいているのは、所得連動を入れたとしても、もしまた可能であれば定額返還に戻せる、あるいは余裕があるときに

一括で返還できるなど、柔軟な対応をしてもらいたい。また、仮に有利子奨学金に所得連動を導入したときの場合は、この利子負担などをしっかりと返還に際して国として対応をするべきであると考えているところでございます。

また、これは一つの返し方でございますが、大切なのは充実をさせていくことだと思います。柔軟に返還できる仕組みをつくるとともに、また、中間層あるいは多子世帯、あるいは理工農系の支援の在り方、ここをしっかりと改善を行っていかなければならないと思っているところでございます。

また、先ほど委員から入学金のお話もありました。この入学金、一括して払うのが大変だというお話も我々のところにたくさんお声が届いているところでございますので、ここもしっかりと見直し等々をしていかなければならないと今日お話を聞いていて感じたところでもございました。

ともあれ、一人一人に光を当てた教育、そして、誰一人置き去りにされない教育をしっかりとやっていくためにも、我々もしっかりと全力を尽くしてまいりたいと思っております。

また、初等中等教育、今日もお話がありましたが、私はここのところはいろいろな現場でもお話をさせていただいて、いろいろな御意見をいただいておりますが、今、SNSの恐ろしさの教育をするべきだというお声もたくさん外部からいただいております。フェイクニュース等々もありますし、また、被害者にも加害者にもなってしまうという、ここのところをしっかり小さいときから指導していかなければいけない、そういう必要があると思っているところでございます。

本日もいろいろなお話を聞かせていただき、あっという間の２時間でございましたが、皆様からいただいたたくさんの御意見、また、勉強をさせていただき、今後に生かしていきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、最後になりましたが、末松大臣から御挨拶をいただきたいと思います。

まずはプレスの入室をお願いいたします。

（報道関係者入室）

○清家座長　それでは、末松大臣、よろしくお願いいたします。

○末松大臣　教育再生担当大臣を務めております、末松でございます。

今日はみどりの賞の授与式典がございまして、遅れてまいりました。５月４日のみどりの日に先駆けまして、植物生態学の研究などをなさった先生方を表彰したり、あるいは緑化事業に非常に奮闘いただいている皆さんに今日は表彰を授与させていただきましたが、授与されましたのは総理大臣でありまして、今日は陛下が御臨席なので、こちらの会で遅れたわけでございます。

40分間ほどお話を聞いていまして、鰐淵政務官からもいろいろと話を伺いました。私は

27ページ全部、もちろん拝読はしております。提案でございます、事務方でございますので、いろいろな切り口がなされておりますが、先生方の御意見はできるだけ網羅をするように心がけたわけでございます。よく言われますが、100人おられたら100通りの考え方があります。でも、100通りはないと思いますので、何通りかの考え方をここに書いてございます。したがいまして、書き漏らし、また新たな切り口がありましたら、清家座長やあるいは事務方を中心にまた御報告なり御連絡をいただきたいということ、そのことを強く思っております。

確かに高等教育の話をしておりましても、結局は初等中等教育からつながってまいりますので、全て連続をしておりますから、理数をなかなか学ぶ方が少ない、リテラシーが４割あっても結局２割になるといったって、それは学校の先生、例えば小学校、中学校でも、社会なり国語なりが中心の先生で理科が苦手だ、数学が苦手だとなったら、ここが伝わってしまう面がありますので、そういう点からどうしていったらいいかということは、若いときからよく考えなくてはいけないと思っております。

柴山先生から話がございましたが、私は思うのですが、あまり財務省のことを気にし過ぎたら、正しい理想を掲げることができない。確かに答弁一つ取りましても、大きな声では言いにくいのですが、注文がたまについてくることはあるのです。財務省は議員間の本会議なり委員会で答弁を見ております。ですから、これはどうかと思うこともあろうかと思うのですが、しかし、あまり遠慮し過ぎてもどうかと思うので、ぜひ正しい議論をしていっていただきたいということ、そのことを強く願っております。

財務省の交渉は、柴山先生、池田先生、鰐淵先生がおりますから、みんなでこれは進めていくべきものであります。人への投資は教育が基本でありますから、ぜひと思います。

細々申し上げましたら、入学金をまとめて払うことはいとう先生がおっしゃいまして、これも実は国会質問で出ております。いただけなかったら途中でやめてしまった方の授業料をもらえないから困るのだと言われる大学、学校もあるのです。ですから、それは小刻みな徴収の仕方もあろうかと思うのですが、先生の御質問を聞いてもそうだなということ、そんなことを思いました。

リカレント教育につきましても、企業が非常に評価がまだ低いのではないかと。システム的にも、また、時間も与えてやらないということもよく聞いてございます。欧米に比べても、欧米は相当の評価がありますが、日本はまだまだ低うございますので、こういうことはこの未来創造会議を中心にして、新たな時代の新たな展開として日本の社会で位置づけたいということ、そのことを強く願ってございます。

もう最後でありますので、今日は柴山元文科大臣、調査会長にお越しをいただきました。浮島先生には公明党の教育改革推進本部長としてオンラインで最後までお付き合いをいただきまして、本当にありがとうございます。

途中参加で議論が十分聞けませんでしたが、議事録も拝見をしまして、また頭の中を整理していきたいと思っております。

長時間にわたりましてお付き合いをいただきまして、ありがとうございました。

○清家座長　大臣、ありがとうございました。

それでは、プレスはここで御退室をお願いいたします。

（報道関係者退室）

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、時間になりましたので、本日の議事はここまでとさせていただきます。

第一次提言案につきましては、この後、また委員の先生方のところにも様々な御相談に伺うかと思いますが、この取りまとめにつきましてはできましたら座長一任とさせていただきまして、本日の議論を反映させていただいた上で、５月10日の親会議においてワーキング・グループにおいて取りまとめた案として提示をさせていただきたいと考えておりますが、そのような取り計らいでよろしゅうございましょうか。

（首肯する構成員あり）

○清家座長　ありがとうございます。

それでは、特段、御異論がございませんようですので、そのようにさせていただきたいと存じます。

これまでワーキング・グループでは、４回にわたり活発な意見を頂戴し、誠にありがとうございました。

それでは、次回の会議等について、事務局より御説明をお願いいたします。

○寺門次長　本日はありがとうございました。

今、座長からお話がございましたように、５月10日に親会議を予定してございますが、追って詳細は御報告申し上げます。

第一次提言案の取りまとめについては、座長と調整させていただいた上で、個別にまた確認をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、本日の会議はこれで閉会とさせていただきます。ありがとうございました。